

ISSN 1344—8366

『古代アメリカ』 *América Antigua*

第 25 号, 2022 年, 抜刷 (pp.95-98)

<リプライ>

『古代マヤ文明-栄華と衰亡の 3000 年』

—レビューをレビューする—

鈴木真太郎 (岡山大学文明動態学研究所)

Suzuki, Shintaro, Reply to the book review:
Ancient Maya Civilization: Three Millennia of Prosperity and Decline

Shintaro Suzuki (Research Institute for the Dynamics of Civilizations, Okayama University)

古代アメリカ学会

Sociedad Japonesa de Estudios sobre la América Antigua
Japan Society for Studies of Ancient America

『古代アメリカ』25, 2022, pp.95-98

<リプライ>

『古代マヤ文明-栄華と衰亡の 3000 年』

ーレビューをレビューするー

鈴木真太郎

(岡山大学文明動態学研究所)

1. はじめに

拙著『古代マヤ文明-栄華と衰亡の 3000 年』に関しては、2021 年 7 月の会報に自著紹介を書き、第 11 回西日本本部会研究懇談会で執筆の裏側を晒し、そして会誌 24 号で書評に取り上げていただいた。これ以上はもういいだろう、というのが正直なところである。しかし、後述するように拙著は「商品」である。わざわざ取り上げていただけるという宣伝の機会をみすみす見逃すのももったいない。また、筆者自身もまだまだ「若手」のつもりだが、自分よりも若い研究者が熱意を持って記してくれた書評に対して、返事もしないというのもやはり申し訳ない。ついては、今回「頂戴したレビューを製作者の立場からレビューする」というスタイルを試してみることとした。構成としては、多くの書評で見られる「概略」、「特長」、「批判」という流れに沿って、それぞれの部位ごとにレビューのレビューを試みている。

2. 「概略」と「特長」

評者にはまずもって拙著を手にとって読んでもらい、評していただいたことに感謝の気持ちを表したい。内容も丁寧に取上げていただき、一部もう少し掘り下げて評して欲しかった部分（各地の通史概略など）もあるが、筆者の思いは概ね過不足なく汲んでいただいたと思う。

「特長」では筆者はあまり多弁になるべきではないだろう。通じて過剰な評価をいただいており、率直に嬉しい気持ちになった。奇数章に考古人骨研究、偶数章に各地域の通史をあつかった、一風変わったようにもみえる拙著の章立てにも適切な解説を加えていただいた。

3. 「批判」

3-1. 年表と図版について

第 1 の批判対象となったのは、図版と表である。具体的には、各章にそれぞれの章で取り扱う地域の地図しか記載できておらず、それによって地域（章）を跨いだ地点同士の位置関係が分かりにくくなっている点、そして各章で地域ごとに説明される出来事の時系列関係を一望できる年表がない点である〔千葉 2021:115〕。ここは

痛いところをつかれたな、というのが本音である。これでは拙著の基本設計理念であった「一般の方にも分かりやすく」が確かに満たされていない。ここについて裏側を明かしてしまうと、実は出版に際して、地図や図版は現行の3倍程度を準備していた。しかし、やはり新書は商業のための図書である。まず売り物としてうまくいくてくれないといけない。そのため、価格設定とそこから製作に投入できるリソースが決められている。出版社には最大限のご配慮をいただいたが、やはり使える枚数には限界があり、最終的に使用できた図版が想定よりも少なくなってしまうというのが実情である。

一方で年表に関する指摘については、完全に筆者の頭のないアイデアであった。重版の機会があり、そして増ページを許可していただけるなら、是非対応をしていきたいと考えている。

3-2. 教科書としての本書について

次に千葉氏による拙著への批判の中で一つ大きな柱になっているのは、教科書として拙著を取り扱う場合の不備である。「球技についても取り扱われていない」、「メソアメリカに広がるさまざまな文化要素を紹介する部分がなかった」、「人身供犠に関する記述はほとんどなかった」〔千葉 2021:116〕。拙著を教科書にしたい教育者の視点からのさまざまな批判が並ぶ。しかし、残念ながらまずもって拙著は研究者、教育者向けの教科書として書かれたものではない。古代マヤ文明をめぐる数多くのトピックの中から、筆者の思う古代マヤ研究の面白いところを一つの軸に沿って紹介し、一般の方々、そして学生の方々から、古代マヤ文明に謎と神秘を超えた興味を持ってもらうための、いわば導きの物語である。そもそも設計理念にない網羅性という性能を求められても、応えられないのは必然、としてはいただけないだろう。

念の為、上記のご指摘に際し一応のマヤ研究者としてリプライをすると、もしも、諸賢が日本語で読める網羅的な教科書を期待されるのであれば、青山和夫氏の『マヤ文明を知る事典』〔青山 2015〕をお勧めしたい。一気に読めるような物語性には欠くが、その名の如く、広範な知見に対して分かりやすい細目化がなされており、テーマごとに端的な説明がある。球技に関する記述なども分かりやすい。またメソアメリカという広域にマヤ文明を位置付けるというテーマであれば、のちに取り上げる嘉幡茂氏の『図説マヤ文明』〔嘉幡 2020〕が最適と考える。図版も多く、拙著で適切にカバーしきれなかった視覚的な側面にも大変優れている。最後に筆者の専門性に近いところで人身供犠に関して特に知見を新たにされたい読者諸賢があれば、拙編著 *“Tratamientos mortuorios del cuerpo humano: perspectivas tafonómicas y arqueotanatólicas”* 〔Tiesler, Suzuki and Pereira 2021〕をお勧めしたい。手前味噌ではあるが、人身供犠を含んだ人体、遺体へのあらゆる文化的な干渉に関して、マヤ圏だけではなく、メソアメリカ全域、アンデス地域、さらには遠くローマ帝国からも所見を集め、網羅的にカバーした、スペイン語の本格的な専門学術書である。

3-3. 人骨は加工品か？

次の指摘は論理的なトピックであり、考古人骨が「加工品」かどうか、という点である。曰く「＜前略＞一定の反復運動により骨上の形質が影響を受けてしまうことも、目的のために手を加えることを意味する「加工」という言葉で表せるものだろうか。」〔千葉 2021:116〕。

この疑問に対しては広い会員諸賢を想定し再度の説明を試みてみたい。基本となるのは *bioarqueología*（骨考古学とも、生物考古学とも、考古人骨研究とも、そのまま英語からバイオアーキオロジーとも訳される。しかし、研究者が欧州で学んだのか、米国、あるいはその影響下にあるラテンアメリカで学んだのか、にもよって、定義が大きく異なり、全員が納得できる定訳は存在しない）の基礎理論の一つである *biocultural* 論である〔Tiesler

2006]。訳語のない専門用語であるが、「肉体そのものを“人の営み”によって形を変えるアーティファクト（arte-facto）として捉える」理論的な枠組みであり、こちらでは意識的な加工（*rasgos bioculturales intencionales*：たとえば頭蓋変形）と無意識の加工（*rasgos bioculturales no intencionales*：たとえば反復運動による骨格系の形態学的な変化）という大別がなされている。評者は特に後者に関して、「加工」という言葉に違和感をもったようであるが、理論的な背景を理解すれば、「体を反復して動かす」という人の営みには、やはり必ず何らかの「目的」があり、そのために肉体=モノが「変化」している（その行為/目的により適した形態に変わっている）のである。であるからこそ、古人骨はあらゆる側面でアーティファクト、すなわち「加工品」という表現こそが最も適切な表現となるのである。

3-4. テオティワカンとマヤについて

こちらはおそらく評者が最も力を入れた批判であると思われる。評者である千葉氏は主にテオティワカンで勉強をされている方なので、納得である。しかし、会誌 24 号の拙書評『図説マヤ文明』をご覧いただきたい[鈴木 2021]。そこでは他ならぬ筆者自身が、テオティワカンとマヤの交流について「指摘が甘い」と嘉幡氏の著作を「批判」しているのである。この状況には正直、苦笑しかなかった。だが、これでははっきりとした事実があるだろう。つまり、テオティワカンに代表される中央メキシコ文化圏とマヤ文明圏の交流、交錯は、非常に重要なトピックでありながら、実は日本語で最も読めない、掘り下げの足らないテーマなのではないだろうか。英語では近年ダンバートンオークスから大著 *“Teotihuacan: the World beyond the City”* [Hirth, Carballo and Arroyo 2020] が出版されている。スペイン語でも目下、新たな大著となることを目指してメキシコ国立自治大学のフェリックス・クップラト (Felix Kupprat)、チューレン大学のベロニカ・バスケス (Verónica Vázquez) と共に、筆者自身も *“Entre montañas y bajos: las relaciones políticas, sociales y económicas entre Teotihuacan y el área Maya”* を鋭意編集集中である。しかし、日本国内、そしてその最大研究組織である古代アメリカ学会ではどうだろう。中央メキシコとマヤ文明圏の研究者同士が直接交流する機会は少なく（たとえば嘉幡氏はメキシコ国立自治大学リンダ・マンサニージャ (Linda R. Manzanilla) 先生門下で筆者の兄弟子にあたるにも関わらず）、所見や意見を持ち寄ることはともかく、資料や一次データを共有する場などはほとんどない。今後は古代アメリカ学会内で汎メソアメリカの直接の研究交流をさらに活発化させる必要があるのだろう。

3-5. 引用、出典の明記がないことについて

この批判については、3-2 と同様に、媒体の特性、制限をご理解いただきたい。一般の方の読みやすさを考えれば、筆者自身の意見、研究成果ではない全ての言及について逐一引用を付し、その出典を示しつつ文章を進めるということは、製品の設計として適切とは思えない。当然、紙幅の都合もある。拙著は出版社に別途予算を持ち込むタイプの（例えば科研費を用いて研究の成果をまとめるなどの）学術書ではなく、先述の通り、教科書でもない。こうした純粋な商業図書の製作は、著者と編集者の二人三脚という側面が極めて強く、駆け出しである筆者にとって、中公新書の敏腕編集者から「読みやすく」「面白く」「分かりやすく」という意見、指示が出れば、それは絶対である。またそれこそが筆者の目指した拙著の設計理念でもある。やはり書を評する際には是非「その書籍の目指すところがどの程度実現できているか」という点をご考慮していただければと思う。

4. さいごに

以上で拙著『古代マヤ文明-栄華と衰亡の 3000 年』のレビューに関し、概ね製作者サイドからの全てのレビューを終えたように思う。学術的な観点からは、やはり最大の論点は古代アメリカ学会におけるマヤ研究者とテオティワカン研究者の積極的な交流の欠如、およびその必要性であろう。今後は是非、会誌の特集号や研究集会などで、上記のテーマを深掘りしていくことができればと考えている。

【謝辞】

レビューの機会を与えていただいた編集委員のみなさま、そして書評を寄せていただいた千葉氏に感謝いたします。

参考文献

青山和夫

2015 『マヤ文明を知る事典』 東京堂出版。

千葉裕太

2021 「鈴木真太郎著『古代マヤ文明—栄華と衰亡の 3000 年』」 『古代アメリカ』 24:113-117。

Hirth, Kenneth, David Carballo, and Arroyo Bárbara (eds.)

2020 *Teotihuacan. The World Beyond the City*, Dumbarton Oaks Pre-Columbian Symposia and Colloquia series, Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D. C.

鈴木真太郎

2021 「嘉幡茂著『図説 マヤ文明』」 『古代アメリカ』 24:107-112。

Tiesler, Vera

2006 *Bases conceptuales para la evaluación de restos humanos en arqueología*, Universidad Autónoma de Yucatán, Mérida.

Tiesler, Vera, Shintaro Suzuki, and Grégory Pereira (eds.)

2021 *Tratamientos mortuorios del cuerpo humano: perspectivas tafonómicas y arqueotanológicas*. Centro de Estudios Mexicanos Centroamericanos (CEMCA) Research Institute for the Dynamics of Civilizations (RIDC), Okayama University, Ciudad de México.

原稿受領日 2022 年 6 月 13 日

原稿採択決定日 2022 年 7 月 8 日